

浄土

1981-3

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受承認雜誌) 第三二五号
昭和五十六年二月二十五日印刷 昭和五十六年三月一日発行
第三号 第四十七卷



信頼こそ人生の伴侶

——受験戦争・非行化に思う——

ことしも受験戦争はもちろん、見守る親にとっても一番頭の重い季節、受験戦争のピーク時を迎えた。日頃培った力を発揮し、望みどおりに入学できたもの、残念ながら夢破れたものと、悲喜こもごもといった様相を呈するが、当事者にとっては、おおげさにいえば

死活問題である。

らのものと、勉強そっちのけで享楽にふけるものさえている。

一方、親といえば、自分たちの生活を切り詰め、犠牲にしてまでも、わが子の将来に賭ける有様である。

また、ここ一年、特に問題となっているのが青少年の非行化である。殊に中学生の大人

顔負けの言動は、全国各地に派生し、深刻な社会問題となってきたいる。

これらの問題解決のため、さまざまな対策がなされてはいるが、一向に収まる様子はない。ときには火種を播く結果となってしまうことさえある始末である。

それでは、根本的な解決策があるものであろうか。答えは、"ノーウ"である。さまざまな要因がからま

入試に対するあせり、心配から、そして失敗したとして、自ら命を断つものがあるかと思えば、入ればこち

り、これ、といった決め手がないからである。本人、家庭、学校、それらを取りまく社会通念・環境と、それぞれに複雑な要因が内在している。

口では無用といいながら、依然根強い学歴優先、偏向の社会、そのために詰め込み式教育をなさざるを得ない、いわゆる画一化教育の学校、そして、高望みを強いる家庭、といった図式ができあがってきている。

こう見ると、どうも青少年が貧乏クジを引いたことになるが、そんな短絡的なものではないまい。彼らには、なぜそうしなければならぬのか、それにどのように立ち向っていくか、という自覚が必要であらう。

こうした短文で、すべてをいい尽すことは危険であるし、ましてできようもない。ただいえることは、それぞれの立場で、お互いを信頼し合うことである。不信任あるところに良い結果はない。信頼こそ心がかよい合う道程であるからだ。来月には、希望をいだいた新入生がそれぞれの門をくぐる。各々の立場で、その夢を裏切らないような環境をつくり出すことが肝要であらう。

(長谷川宣丈)



三月号



念仏する者は、命を捨てて己後、決定極楽世界にして往生す。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.153)

目次

育ちゆく若い人たちへ……………徳久鐵郎……(2)

お彼岸俳話……………河野喜雄……(10)

■随想■ 幻の仔犬タロ

—伊豆高原徒然草より—……………木下隆一……(15)

(連)(載)(法)(話) 第六回

浄らかな訣れ……………小布施弘学……(6)

<ずいそう>

フランスで会った人々……………曾田文雄……(32)

モンゴル旅愁……………細田隆善……(20)

<連載>

アンコール・ワットSOS(三)

—ブノンペン博物館・バタンバン美術館— ……石沢良昭……(22)

浄土句集……………一田牛猷選……(28)

<表紙のことば> 鶏抱き童子……………土屋正男……(30)

<表紙裏・巻頭言> 信頼こそ人生の伴侶……………長谷川宣文

念仏ひじり三国志◎——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部



育ちゆく

若い人たちへ

徳久鐵郎

(芝中・高等学校長)

わたしは人が順調に成長するのは、からだの発達にともなって心が同じ速さで発達する、その両方が平均していることだと思っています。心といっても、頭あたまと言ってもさほど変りはないと思っています。学校で教わるというのは助けて貰うわけで、発達の程度が早く深くなるのだろうと思っていました。

たしかに学校で教わることを積み重ねていきますと、年月を経て、いつの間にか、驚く程進歩しています。この人間の教育ということの効果には驚嘆するばかりです。日々の教育の少しばかりの進歩を見ていても、大して進んでいるように思えないのが歳月を経て



大きく変化します。毎日、どんな所で変化しているのでしょうか。発達するのは、それは脳のどこかだろうと思うのですが、難問にぶつかって解こうとあくせくしているとき、あるいは解けないで苦心してあたためているとき、脳はひとりで大またで進歩しているのであります。

「科学朝日」という雑誌の昨年の二月号に脳のことを研究しているアメリカの学者の報告がいささか紹介されました。それには「心は混ぜられたシチューのようなもの」という題目をつけてありました。

それによると、十七世紀のデカルトは、脳の中心の松果体が心の座ではないかと言ったが近代になると大脳皮質がその下部の構造を支配していて、心はその大脳皮質といえるようになってきた。この筆者のホレイス・W・マグリーンはいろいろ実験してみ、心が全体を支配していると言えるその管理の主人公は、ブレイン・システム(脳幹)にあるようだ、と言っています。それは延髄・中脳・間脳・線条体・諸核等の大脳・小脳以下の凡てが脳幹で、そこが全体として働いているということらしいのです。

心は、頭脳は、どう言っても同じでしょうが、いろいろの機関がたがいに作用し合っているらしいので、どこがどうとは決定しにくいといっているのだろうと思われます。



むかし、わたしは少年時代に、釈宗活老師様という円覚寺で修行された禪僧に入門して坐禪の教えを受けたことがあります。初め、入門したらず、公案をいただいて、毎日曜日に通い、参禪をいたしました。二年ぐらいたって、老師のお弟子の立田英山老師に叱られ、続けて熱心に修行をする決心をしました。この時、「心はどこにあるか」というような意味の公案を日夜、参禪してくふうしたので、宗活老師という方は、夏目漱石の「門」の中に登場する宜道という名前で、漱石の朝晩の参禪を激励してくださる坊さんのことだと、後にききました。平塚雷鳥女史の「元始、女性は大陽であつた」という自伝にも、立派な禪僧として出てきます。やさしい言葉で、はじめから指導して頂いたのですが、坐れば坐る程よく判らないという一語に尽きるのです。

東京の学校が、休みにはいつて、学年の変わり目でしたから三月末です。九州の戸畑の山の上で一週間の坐禪を続けました。東京から行った学生は二人いましたが、とまり込みで坐っていて足が痛いのも忘れ、全身の神経がビリビリしているようになった三日目の夜、わたしの肉体と戸畑の山と戸畑の市内と一つにつながってしまいました。つまり、神経衰弱の初歩のようなものだったかも知れませんが、「心」が、作用している全身の肉ばかりでなく、外部の世界ま



で皆続いている所で「心」として働いているのです。私が、私の外にあって、私の中で電車が走ったり、とまったりしている。いかにも、これこれ、といったような、日頃、経験したことのない、境遇になってしまったのです。翌朝、わたしは、全身で、老師（立田英山老居士といっていました）に、法然上人に親鸞が入門でもするようにすがすがしい気持で入室しました。わたしはその時、心はシチュエーだ、という意味と同じようなことを感じていたようです。

何か、心という判らない働きをくふうすることで、仏教でいう、自力とか他力とか言った、日頃聞いていた教えが、皆、わかったような気持になりました。

釈宗活老師も、立田英山老居士もなくなりました。終戦のころまで、日暮里の沢木道場に仏教の教えを受けていた大峽秀榮先生もなくなりました。わたしは、諸先生の胸の中がわたしの胸の中につながっていて、朝に晩に「これこれ、目を覚ましているか」と呼ばれているような気持です。

人の心の中に、こちらの心がすらすらいってゆくような、そんな気持でないと家庭も職場も、学校の教師もつとまらないのです。この気持を、誰にも教えて上げたいものだ、といつも思っているのです。



連載法話 第六回

浄きよらかな訣わかれ

小布施 弘学
おぶせ こうがく

(長野市長明寺住職)

思うに、人生は出会いと訣れの織りなす世界である。

その人との出会いの有無によって、おのれの得分が開発されて成功の道をたどることもあれば、折角の素質を持ちながら、その人との出会いがなかったために、徒らに埋もれてしまう人もある。「縁」というものは誠に不思議なものである。善縁に会いたくとも、出会いがなければ望めないし、悪縁を断とうとしても出会いがなければ不可能である。

仰ぐ夜空に輝く星が無数であるように、数えきれない

多くの男性の中から、その人、一人を夫と定め、足元を流れる川の砂が無限であるように、数えきれない多くの女性の中から、その人、一人を妻と定めて結ばれたことは、人知の計るところではなく、なにかしら眼に見えない縁(えにし)の引き合せによるものである。

あなたがその人と結ばれずに、ほかの人と一緒にになったら、現在以上の幸せになったかも知れないし、またなれなかったかも知れない。これは人間のうかがい知るところではない。私達は今現に出会ったこの因縁を大切に

していくよりほかに道はない。

「会うは訣れのはじめ」会者定離はこの世の習いといわれる。これは寂しく悲しい言葉である。然しこの反面に救いのあることを見逃してはならない。仏教では、「此世及後生」即ちこの世及び後の世を教えるものであるから、この世で訣れても後の世で会う日が目前に近づいてくるのである。そこに想いをいたした時、寂しく悲しい訣れが、ひとときの夢であって、次の出会いを嬉しく楽しく待つ心が拡がってくる。

「父子相迎、一蓮托生」の信仰は、出会っている者が訣れていく時の心の持ち方を教えたものである。娑婆の訣れは、ひとときの訣れ、春の夜の夢の如し、宿縁空しからずば、同一蓮に座せんと教えた法然上人の信仰に深い感動を覚えると共に、会別煩いなしの安らぎをもつことが出来るのである。

この程、私の檀家に、二人の間に始めて恵まれた愛の結晶が、不幸にして八カ月で死産の憂き目をみた若い夫婦があった。その赤ん坊は男の子だった。夫婦の嘆き、家族の悲しみに貫いた泣きをした私であった。

「明るいこの世の中に生れることなく、死んでいった

赤ちゃんよ、速かに阿弥陀様の国に生れて、今度こそ、丈夫な命をもって一日も早く母のお腹に帰って来てくれ、そして、近い日に、元氣よく産ぶ声高く両親のもとによみがえってくれ」と祈り、そのために徒らにこの訣れを悲しまず、近き出会いに希望をもって、心からお念仏を称えようと、私は告別の人々に語ったのである。いよいよ埋葬の時間が来た。

信州は豪雪と厳寒で、墓地は氷ついている。ようやく掘り上げた穴は、氷室のようである。私はこの子を凍りついた穴に入れるのがしのびなかった。私は予め用意して来たあの使い捨てのカイロを、「舍利札文」を称えつつサツサツと振り、赤ん坊の棺の上にのせて埋葬したのである。告別の人々の称える念仏が、乳母車となり、菩薩様におされ、引かれながら、花の都お浄土に生れて、一日も早くこの世に再び帰ってくるように念じたのである。

訣れは辛いけれども、訣れることによって又の出会いが近づくと信じた時、流す涙もおさまるのである。

さて、今の出会いはいつまでも続くものではない。時々刻々と訣れが目前に迫って来ると知った時、

只今の「出合い中」を大切にしなければならぬ。

私の檀家に、若山牧水の高弟であった 中村柊花という歌人がいたが、彼の晩年の作に、

仮りの世の仮りの命ときけばなお

世にある今を おろそかにせず

という素晴らしい歌がある。

仮の世であればこそ、真実に生きねばならないのであり、訣れがあればこそ今の出合いをおろそかにしてはならない。

懈怠に生きる人は、人生は長く感じ、真実に生きる人にとって、この人生は決して長いものではない。真実に生きる人は、怠ることを知らないのである。真実とは悔りなく励むことなのである。

私が永い間、善光寺大本願白道会において親しくしていた篤信の青山時子という老婦人があった。若い人は遠方の勤めであったため、老夫婦だけで静かに余生を送っていたのである。然し至極健康である夫人は、地域社会のため献身的に奉仕し、特に婦人会の活動には熱心であった。勿論この夫婦は、大本願に開かれた五重相伝に再三入行して、熱心な念仏信者であった。

夫人が忙しく出かける日には、必ず主人は夫人の後姿に「お前のお日課（念仏）も私がつとめておくから安心して行つてきなさい」という言葉をかけたそうである。やがて主人が病床につくようになると、お互いに余計な雑談を交わすことなく、夫婦声を揃えて専ら念仏を称えて残り少ない出合いを大切にしていたそうである。

この主人が亡くなった時、私が悔みの言葉を述べるに、夫人は、私に合掌して、「私はいま主人と訣れましたが、少しも悲しいことも寂しいこともございません。何故ならば、五十年にも及ぶ夫婦の生活で、一度も口争いもいたしたことがありません。主人もよく私に心をかけてくれましたが、私も主人に仕えたことに一つの心のこりもございません。相手にしてやれなかったことがあったり、いろいろな未練があれば、泣くことも悲しむ気持ちにもなるでしょうが、私には主人に思いのこすことが全くありません。しかも、この世の訣れは未来永劫のものではなく、もう私もお浄土参りが近づいて、半座をあげて待つてくれている主人と蓮の台で出会う日が目前に迫っていますから……」と語った。

なんという「浄らかな訣れ」であろう、会別共に煩い

のないこの心境は、念仏信仰によって到達したものである。

この夫人も、長野の一人住いから東京の家族のもとに帰り、やがて病床に老衰の日を送るようになったのである。私は上京の折、面接を申し出たところ、「貴僧に今日の私の姿をお見せしたくありません。元氣であった頃の私を生涯、臉におさめていて下さい」と、家族の人の伝言があった。

嗚呼！この世は「一期一会」である。いま訣れたら、再び今生の出会いが不可能であると意識したら、その時その時の出会いを大切にして永遠によき想い出を彩っておかねばならない。

兎角、いやな悪い想い出が、記憶がのこり勝ちな人生において、いつ思い出しても、悔いや、未練のない生き方が大切である。

法然上人の有名な法語に、

「ついに閻魔の片に、いたりぬれば罪の浅深をさだめ、業の輕重を、かんがへらる、法王罪人に問うていわく、なんじ仏法流布の、世にうまれて、なんぞ修行せずして、いたづらに、帰りきたるやと、その時には、われら、いか

がこたえんとする。すみやかに、出要をもとめて、むなしく三塗に帰る事なかれ」

と、強く戒めているのである。

出会いはい座して待つべきものではない。進んで、よき出会いを求めようと努力しなければならぬと思う。あたらし人生を三塗（むさぼり、いかり、おろかさ）に身と心を墮すことのないようにと、弘められた仏法の世に生れながら、その出会いを求めず、おろかにも、名聞利養のみに明けかれて尊い生命を浪費して老境に入って愁嘆の声をもらしてはならない。

行誠上人は、

いくたびか法の時雨にあいながら

そまるにうすき わが心かな

と詠っているが、「めざめよ！ 気づけよ！」との仏の声を馬耳東風に聞きながし、真実白道が目先に開かれていけるのも知らずに迷いの横道にそれてはならない。心静かに合掌し念仏するところ、そこに仏との出会いがある。「浄らかな訣れ」になるように今日只今の生き方を堅実にしたいものである。

人生は出会いと訣れの世界である。

（了）



お彼岸俳話

河野喜雄こうの よしお

(文芸評論家)

彼岸

先づ、「彼岸」であるが、それが春分を中日として、前後三日づつの七日間の意味であることは、誰でも知っているように。

その「彼岸」の語は、仏教における「波羅」の訳語であって、現実的世界の「此岸」に対して、理想的世界たる「彼岸」すなわち、極楽浄土を意味し、その彼岸に到ることが、いわゆる「波羅密(多)」である。

そのような意味の「彼岸」が、どうして春分・秋分を中心とする七日間に宛てられたのか、定かでないが、中国からわが国に輸入せられて、奈良朝以降、宮廷を中心に盛行せられ、ことに平安朝に入つての最澄・空海以降

は、殆んど国教同然となるとともに、政治・政策面においても大きく寄与した仏教が、この「彼岸」の語をもつて、恰かもわが国土における農耕の開始期・終止期であるとともに、自然的・気候的にも温暖・快適・佳麗であつて、言わば現実的な「浄土」であるような、春分・秋分の時季に充て、古来の原始宗教的な農耕行事に仏教的祭典を習合せしめて、いわゆる「彼岸会」を始めたのが、その起源であらう。

しかしながら、その「彼岸会」には、余り仏教的色彩は濃厚ではなく、墓詣りだけはするけれども、そのあとは飲食物を携えて、諸人打連れて山野に遊行し、いわゆる「遊山」的行事をするのが一般である。

そしてその「彼岸」は、今や完全に、私たち日本人の

ものとなった。

道元は、

而今の山水は古仏の道現成なり

（『正法眼蔵 山水経』）

と喝破しているが、春・夏・秋・冬、それぞれに三カ月ほどのわが国においては、天地自然・山河草木は、その四季において、それぞれにその最善・最美の姿を示す。

春は山河はやわらかな霞衣を纏い、草木は花を飾り、夏は草木の青葉若葉が山河を極彩色に、秋は黄・紅葉が山河を衣替えするとともに、木は実り、草も多くは花咲く。冬だけは常緑樹を除いて万物枯に尽すけれども、併も彼らは營々として、来春のために貯えつつあるのであり、雪を戴いた高山連嶺は、朝日・夕日にその雪衣を染め輝やかしているではないか。

まさに仏の教喝するところの

生滅滅已 寂滅為楽

を、宛然、現成しているのであって、ことにその春秋が、まさに波羅・彼岸であることは、誰しもこれを疑うまい。

そして、その様な自然的風土に、少なくとも二千年以上、生き継いで来た私たち日本人が、この「彼岸」の語に馴染んだことは疑いなく、私たち日本人のこの「彼岸」は、仏教からの伝来語であるとは言え、印度人も、中国人も、朝鮮人も、決して知らないであろう、私たち日本人だけの「彼岸」なのである。

さて、それでは、その「彼岸」について、これもまた私たち日本人の独創にかかると、世界最短・至高の文学「最短」形を以てして、しかも文学たり得たとすれば、それは当然「至高」のものである、と私は信ずる。である「俳句」の作家、俳人たちは、どの様な作品を示しているであろうか。

「彼岸」の俳句

私は、先づ私の心師・真師である芭蕉の作品を挙げたいのであるが、まことに残念ながら、芭蕉には「彼岸」の句は、一句もない。

後で触れるように、「彼岸桜」の一種である「糸桜」の句は、二句あるが、自風樹立前の句であって、取上げるほどのものではない。

梅・桜・花（俳句では「花」は「桜」とシノニムである）の句は、何十句もあるのであるが、彼岸の句はなく、芭蕉はおそらく、その「彼岸」時の自然的、風土的「象徴」としての「桜」・「花」に、その関心を集中していたのだろう。

それで、第一に挙げたいのは、私の先師、「雲母」創始の飯田蛇笏師（私は昭和二十五年以来「雲母」同人）の左の一句である。

山寺の扉に雲遊ぶ彼岸かな

私は昭和二十一年五月、南方から帰還直後、「雲母」入門の為、蛇笏先生のお宅へ参上して以来、数度お邪魔しているのであるが、先生のお宅は山梨県東南部の、峠の登り口に程近い高地の豪家であつて、そのお宅を少し登ったところに、山寺もあった。この句はおそらくその山寺の写生句であらう。

一生、その山国に住われた蛇笏師には、山野の自然詠句が頗る多く

春めきてものの果てなる空の色
月いよいよ大空わたる焼野かな
雪解富士戸々の賤機こだませり
野おぼろに水ノ口祭過ぎし月
春蘭の花とりすつる雲の中
椿寺雲ふかぶかと魚板鳴る

などの名句は人口に膾炙しているのであるが、この一句も同様に泰然として徴動せざるところの名句であつて、能くその時・処・態様を的確に把握しており、その格調、また極めて高遠である。

竹の芽も茜さしたる彼岸かな

芥川竜之介

芥川の句数は極わめて少ないが、能く芭蕉に学び、また先師蛇笏とも親しく、その吟風を範としたであらうこ

ともあって、駄句のようなものは、殆んどない。

竹の芽に茜色が萌したという、誰もが見落すに違いないような、極めて陰微なものを、炯眼にも看取して、そこに「彼岸」の象徴を吟出しているのは、流石に詩人である。

まさをなる空よりしだれざくらかな

富安風生

前にも触れておいたが、枝垂桜または糸桜は、彼岸桜の一種であるから、この句は、彼岸の句として挙げておいてよからう。

虚子直系の写生派作家として、「若葉」を主宰せられた故風生先生は、私が一時在職した通信省に大橋越王子先生に次いで次官となられたお方であるが、先生が芸術院賞を受賞せられた時、私は「通信協会雑誌」の編集長として、お祝いの対談をさせていただき、この「しだれざくら」の句碑が、市川市の某寺に除幕せられた際にも、私は参列している。

そのお寺の大きなしだれ桜の木を見上げつつ、私はそ

の「まさをなる空より」という上半句の的確なる「写生」と、一句の格調の、独自の鷹揚さを痛感したのであった。

この句は、誰にも素直に飲み込めるのではないだろうか。

糸桜夜はみちのくの露深く

中村汀女

当代女流第一人者の作であるが、私は、やっぱり流石だな、と思う。

衆知のように、東北地方の桜は、東京辺よりやや一月ほど遅れて咲く、そしてその東北は湿気の多いところで、十一月頃から四月頃まで、約半年間は、雪や霰の降る日が多く、ことに裏日本において然りである。

その東北にも、糸桜の咲く日が来た。しかし、半年間続いた湿気は未だ去りやらず、夜になると、もうその露が深い——というのである。

桜の花を見ながら、誰しも露などのことは思っても見ないであろう。そういうところをチャンと看取取っている

て、東北地方の特殊性を的確に把握しているところが、ヤッパリ第一人者の貫禄なのである。

最後に、拙吟を少しお目かけよう。

私は吉祥寺に住んでいるので、始終散歩に行く、井頭公園での吟出である。

地に触るやたまゆらに消ゆ彼岸雪

神苑池水気炎え立つ彼岸雪

鳩かひづるひとり見廻す彼岸雪

鳴の水尾輝き著き彼岸苑

最後の一句を際いて、彼岸雪、すなわち春雪の句であるが、極く平凡な写生句であって、何方にもお判りであろう。

ただ一つ、第二句であるが、彼岸雪のさ中、小湖ほどのあの池の水面から、真白に水気が噴き上げるのには驚いた、まさに、「炎える」ようであったのである。

(55・12・21稿)

Ⅱ好評Ⅱ

總本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺
大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。

すでに三版を重ねて、好評発売中。

B 6判 二二〇頁 価一五〇〇円

(千二百五〇円)

(申し込み先)

千 381-12 長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺

振替(長野) 一四三二二



幻の仔犬 タロ

— 伊豆高原徒然草より —

地震^なふりて枯山惨たりテレビの画

昭和五十三年一月十四日、突如伊豆半島を襲った地震は、各地に大きな被害をもたらした。のちに『伊豆大島近海地震』と命名された地震である。第一回目の激震が来たのは昼前であった。西側から東へ向けて大きく揺れ、その後激しい上下動が続いたように思うが、記憶は定かではない。立とうと思っても足をとられて立てず、這うのがやっとだった。家

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

はいまにもバラバラになるのではないかと思われる程、悲鳴をあげ続けていた。大揺れがおさまっても、何度か強い揺り返しがあり、その後数日間伊豆半島は揺れ続けたのである。タロは台所の土間の自分の箱に坐っていたが、別段怯えるでもなく、私が抱きあげると時ならぬ時にかまってももらえたので、全身で喜びを表わして私の顔を舐め廻した。「地震の前には動物が騒ぐって言うが、こいつはちっとも騒がなかったじゃないか」

私が言うと、ようやく顔に生色の戻った女房は、

「飼主に似て鈍感なのよ」

と、にべもなかったが、タロだけでなく、近所の飼犬で異様な鳴き声を立てたのは一匹もいなかった。

犬が人類と生活し始めたのは何万年前からか知らないが、長い間に天変地異に対する予知能力というか動物的感觉を失ったのは事実であろう。野性の犬はそれほどでもないだろうが、飼犬にそういう感覚が欠如していることは否めない。

「鈍な犬!」

と、鼻に息を吹きつけてやると、タロはベロベロと自分の鼻を舐めた。隠元豆ほどの大きさの鼻が黒々と濡れて、健康なことを示している。

○

初雪や大室山の麓まで

暖かい伊豆、というキャッチフレーズがあるが、伊豆も冬は雪が降るのである。伊豆高原といっても海岸に近い私の住んでいるあたりは減多に雪が降らないし、積もることも一年に一度あるかないかだという。その減多にないことが、今日二月十五日に起ったのである。朝明くから降り出した霰は気温が上るに従って雪に変わった。水分の多い、いわゆる牡丹雪である。見る見るうちに黒い地肌を隠し落葉を埋め、正午頃には五糎程の積雪となり、午後三時現在まだ小止みなく降り続けている。

ベランダからタロを庭へ出してやる。白い雪を見て訝しそうに私を振り返ったが、恐る恐る片脚を踏み出した。片方の脚は持ち上げたまましばし思案の態であったが、危険を感じなかったであろう。勢いよく前進して、あとは唱歌の文句通り、犬は喜び庭駆けまわり……で、あつという間に裏の方へ行ってしまった。それきり、いくら呼んでもタロは帰

つて来ない。足跡を辿って行くと、垣根の間から外へ出ている。そしてその足跡は隣の三好さんへのびている。遊び友達のケメコを訪ねたのは明らかである。ケメコはタロより半歳ぐらい年上の雌犬で、一緒にいても血を見るような派手な立回りを演ずることはないから安心である。

あとで連れに行けばいいや——とばかりに部屋に籠って、アメリカのひろみに雪便りのペンを執る。

雪はまだ降り続いている。風も出て来た。



五月の連休明けの頃から、伊豆高原の別荘地帯に急に野犬が目立ち始めた。昼間から集団でうろうろされると、私のように犬を怖がらない者でもあまりいい気はしない。女性や子供たちには脅威であった。私もタロを連れている時は気を遣った。人間がついているので襲って来たりはしないが、タロの方が敬意

を表しに近寄ったりすると、かなり緊迫した事態に陥ることがあるのである。

タロが我が家に来て、五カ月が過ぎようとしていた。寒い最中も元気で順調に育ったが、体は小さく、ムクムクした産毛が抜けて短い夏毛に衣更えすると、体つきが細っそりしてむしろ小さくなったような感じさを受けた。そんなタロがとうとう野良大軍団に引っかけってしまった。庭にいたるとばかり思っていたのに、いつの間にか遊びに出たらしく、呼んでも一向に飛んで来る気配がない。探しあぐねて、念のためにと不断使っていないベランダの下の犬小舎を覗いてみたら、奥の隅にちぢこまって震えていた。

「どうした、タロ、出て来い」

と声をかけたが、怯えた目を向けるだけである。そして、しきりに後脚の腿のあたりを舐めているのである。

やられたな、と咄嗟に私は思った。顔をバラ掻きされている。どんな大きい犬にも決し

て尻尾を下げたことのない奴だったので、単身がむしやらに飛び込んで、喧嘩巧者の連中にいいようにやられたに違いなかった。嫌がるのを無理矢理引きずり出してマキロンで消毒してやったが、タロはすぐまた小舎に隠れてしまった。夕方晩めしを作っていると、ようやく台所に戻って来たが、食欲はあまりなかった。野犬に襲われたのが相当こたえているようであった。これがもとで、いじけた大にならなければよいがと、それだけが気懸りであった。翌日は元氣を取り戻したが、脚の傷はえぐり取られたように深く、まだ血がにじんでいた。

六月二日、タロの傷は殆ど癒えた。夕食後タロは遊びに来たケメコと庭でふざけ合っている。犬どもが蹴散らすおかげで、庭木の下草は除草の手間がはぶけるのである。

「蚊が多くなったし、台所の土間もタロには少し狭くなったようだから、玄関に移してやりますか」

女房の提案に異存はなかった。私自身そうしてやろうかと考えていたからである。

八時頃、ふと気がついてタロを呼んだが返事がない。ケメコの所へ行っているのかなと、その時は別に氣にも留めなかったが、九時になっても十時になっても帰って来た氣配がない。俄かに私は胸騒ぎがした。

「三好さんに電話してみろよ、まだ向うにいるかも知れない」

しかし、私の予想はずれた。ケメコは帰っているが、タロは見えないという返事であった。十時半になって、私は懐中電灯を手を探しに出かけた。あてはなかったが、いつも散歩する道筋を歩いてみた。森閑としていて、自分の下駄の音だけがいに高く私の耳に響いた。

その夜以来、タロの消息はぶつとりと跡絶えたのである。近所の小、中学生は勿論のこと、新聞屋さん、洗濯屋さん、郵便配達の人、飲食店の出前の人たちと、ありとあらゆる

る人々に探索方を依頼したが、結局は徒労であった。まるで神隠しにあったように、タロの行方は杳として知れなかった。

「いい犬だったから、車で連れて行かれたんでは……」

そんなことを言う人もあった。

「そろそろ彼女が欲しくなって家出したんじゃないですか。なに、愚物が落ちたら帰って来ますよ、申訳なさそうな顔をしてね」

変な慰め方をしてくれる人もいた。

一応市役所の係へも連絡したが、最近城ヶ崎地区で野犬狩りをしたことはないとのことであった。

私はあせっていた。というのは、月半ばにはタロに会うのを楽しみにしているひろみが、夏休みで帰って来るからである。飛行機の都合で予定より五日ほど遅れて、十九日、ひろみは帰った来た。タロがいなくなったと告げると、ひろみは一瞬眉を曇らせた。

「いなくなった?! いなくなったんじゃ仕方

ないわね。……私にとって、タロは写真で知るだけの幻の仔犬だったのね」

幻の仔犬か——うまいことを言いやがる、と私は思った。

タロがいなくなって三月が過ぎた。夏休みが終って、ひろみもアメリカへ帰って行った。タロはいまだに帰って来ない。

いつ帰って来てもいいように、タロの物はそのままにしてある。女房は思い出したようにタロが使っていたタオルや毛布を日に当てたりしている。私はこれまで外に出る時は、見つけたら連れて帰ろうと必ず鎖をポケットに忍ばせていたが、いまはそれもやめてしまった。タロが永久に現れないと思ったからではないが、虚しい努力のような気がしたからである。帰りたくなれば帰って来るさ——いまはそんな心境である。

必ず生きている、と信じているからこそ、私はいまだにタロの追悼句を作らないでいる。

モンゴル旅愁



ほそ だ りゅう ぜん
細 田 隆 善

(東京・三好勢至院住職)

ジンギスカンの王城の跡なし夏草に

モンゴルの風飄々と吹く

ジンギスカンの王宮の跡の草原に

大石の亀西の方を向く

ハラコルムのゲル(包)を出づれば冷々と

十六夜の月澄み渡り見ゆ

モンゴルのゲル(包)の一夜は寒くして

白樺の薪を燃やし続けり

幾十台戦車を載する貨車長し

中ソ国境の駅は近づく

都なるウランバートルの博物館の

館長巧みに日本語を語る

プロペラの飛行機は降りぬカラコルムの

草原に砂吹き巻きあげぬ

モンゴルの谷間にゲル（包）の一群が
茸の如く並び建ち見ゆ

モンゴルの大草原に羊群れ
短かき草を食みては移る

モンゴルの少年馬に鞭をいれ
六頭のヤクを連れ来り笑む

モンゴルの駅にて写せる同行は
兵にフィルム取り上げられぬ

モンゴルのハンボラマ管長の墓前に
信者は頭をすりつけて来ぬ

黄色なる雑草の花咲き続く

モンゴルの国境汽車は越へゆく

合掌し五体投地の礼拝する

ラマ教信者の皺の彫り深し

ラマ教の三衣の色は褐色の
大地の色に似たる原色

モンゴルの草原の日は暮れ易し
ラマ僧とわれの影長く曳く

ラマ教の本堂暗く仏画見ゆ
男女の擁する歓喜の像

大いなる歓喜の像を前にして
通訳小声にエクスタシーといふ

信仰の極地は男女の目合と
説けるラマ教モンゴルに生く

金銀の絵画と文字にて綴りある
西藏經典手にとりて見ゆ

モンゴルは信仰自由といはれども
寺院はなべて国のものなり

特 別 寄 稿



アンコール・ワットSOS (三)

— プノンペン博物館・バタンバン美術館 —

石 沢 良 昭

(鹿児島大学教授)

一、ホーチミン市からプノンペンへ

アンコール遺跡調査団(私と記録班の日本電波ニュース社六名)が成田を出発したのは昨年七月三十一日であった。バンコックでエール・フランス機に乗り換え、ホーチミン(サイゴン)市に到着した。五日間滞在し、カンボジア総領事館から入国査証の交付を受けた。八月四日朝二台のマイクロバスでホーチミン市を出発し、国道一号線を一路プノンペンへ向った。この道は私が幾度か往復した道であったので、沿道の街並や風景を想い出しながら、両国のこの十年の歩みと変革に、感奮(かんふん)を新たにしていた。タン・ソニエット空港の横を走り抜け、タイニン

省近くでは、壁に「一つ目」を大きく描いたカオダイ教の寺院が見えていた。沿道の家屋もまばらになり、地平線まで広がる水田とのかな田園風景、そこはメコン川の肥沃な大デルタ地帯であった。水牛に犁を引かせる農夫、あみ笠をかぶり、のんびりとした野良仕事、土間の農家、数年にわたる忌まわしい国境紛争なんか存在しなかったみたいにな平和な景観であった。

一八六一年の仏領「コノチシナ」と一八六三年の保護領カンボジアの成立により、一八七〇年にフランスは国境標識一二四個を敷設したが、その後勝手に六回も修正を行ない、国境画定が複雑化していた。両国の国境紛争は、民族的な確執という見解もあるが、それ以前にもつ



アンコール・ワット近くの村

—田植がはじまったところ。

村人が元気に仕事に励んでいる—

た技術的な画定問題に端を発しているのである。幾つもの大小の橋を渡り、カンボジア国境に近づくと、クロマー（布切れ）を頭にのせたカンボジア人農民の姿が見えてきた。ベトナム側の市場へ買い物に来ていたのであつ

た。そして、粗末な掘立小屋がカンボジア国境検問所であった。以前に来た時には、先ずベトナム側の検問所で出国の公印をもらい、遮断横棒をあげて、幅約二キロほどの中立地帯を走り、カンボジア側へ到達したのを覚えている。今回の国境紛争の結果、この中立地帯がなくなつてしまつたのであろうか。

平坦なメコン・デルタ地帯を走り続けた。二頭立ての水牛の引く犁、高床の家屋、トトノット（オウキ椰子）、クロマー（布切れ）を頭に被つたカンボジア人農夫たち、ゆっくりとした農作業風景、国境を越えると周りの景觀がすっかり異なつてしまつた。かつては沿道から村の樹林の上の方に黄金色のバゴダ（仏教寺院）の尖塔が見えたものであつたが、そのバゴダが殆んど損壊、爆破されてゐた。

ネアクルンの渡し場で順番を待った。新車のトラックが次々と順番の列につながつた。これらはユニセフ援助のトラックで、食糧・資材の運搬をやっているとのことであつた。ブノンベンに近づくと、沿道にはニッパ椰子の小屋が延々と続いていた。ブノンベンでは市内居住が制限されているため、昼間市内へ出稼ぎに行く人たちの

小屋であるという。昨年八月現在で、市内の人々は約十万人、郊外に約二十万人がいるという。午後四時すぎ、外務省のゲストハウスに到着、旅装を解いた。

一、ブノン・ベン国立博物館の破壊調査

先ずブノン・ベン国立博物館を調査した。旧王宮の北隣りに在るこの博物館は、朱塗り漆喰のカンボジア独特の建物で、正面の大陳列館と中庭に面した三つの展示館があり、一九二〇年に開館された。展示品は五世紀から十四世紀までの石彫像、遺跡の部分（破風・楣・壁面浮彫りなど）、ブロンズ像、石碑、陶磁器、金細工など数千点に及ぶが、特にアンコール期の秀逸な彫刻類および見事な浮彫りや破風の一部を陳列していることで有名である。

大陳列館および三展示館とも若干の破壊があったが、ほぼ無事であった。彫刻・浮彫り等の配置およびウインド展示は全く以前と同じであり、動かしておらなかった。ただ東展示館の一隅にボル・ポト政權下で破壊されたといわれシヴァ神立像、および四本院のヴィシュヌ神立像の破片や手足のかげら三十箇ほどが集められ、ウィ

ンド内に収納されていた。ほかに女神像とナーガ上の坐仏像が一部損壊していた。

ただ驚ろいたのは、三展示館内の全彫刻類・浮彫りなどの上に白いベンキの斑点が付着し、ある立像などは肩や頭上がまっ白になっていた。この白ベンキは故意につけたのではなく、雨漏りで天井の白ベンキが水滴と共に落下し、付着したのであった。外に出て屋根を見ると、瓦の一部が欠けて落ちていた。副館長タウ・スン・ヘン氏の話によれば、ここ八年ほど屋根の修理や手入れが全く行なわれていなかったという。物言わぬ彫像がみんな白いシミで汚れ、気の毒な容姿になっていた。

中庭の小堂に安置してある癩病王座像も無事であった。髭をはやした精悍な顔つき、肩から腕にかけての秀麗な曲線、图像学上から高く評価されているクメール彫刻の逸品である。アンコール遺跡内の癩病王テラスに置かれていた坐像は、この像の複製である。アンコールではこの坐像が鈍器で打撲した痕があり、頸部が切裂していたが、鉄筋が入っているため切断できなかった。数年前の新聞報道では、この博物館が荒らされたと言っていたが、誤報であったことに一安心した。

博物館のすぐ近くには、金色まばゆい王宮が在る。高い城壁に囲まれ、外からは舞踊殿や王宮の屋根が見え、プノンペンの記念建造物である。許可を得て中に入った



プノンペンの市場

—にぎわう市場と買物客—

が、内苑から聖剣殿、玉座殿（謁見の間）、宝物殿を見てまわったが、壁面の剝落、雨漏りの痕、褪色したカーテン、煤けた窓枠や床面などここ数年間まったく放置されたままだったらしい。玉座の椅子が切り裂かれ、布がはみだしていた。隣接した王の菩提寺銀寺も手入れがなされていなく、荒廃していた。

三、プノンペンからバタンバンまで

プノンペンでは新紙幣が使われはじめていた。ポル・ポト政権下で通貨が廃止されたが、六年ぶりの復活であった。新紙幣は五種類あり、五リエルが高額紙幣であった。ドルとの換算率は一ドルが四リエルで、一リエルが約五〇円ということになる。

私は度々市場に出かけ、買物をしたが、米一キロが三リエル、スイカ一個が、五リエルであった。ベトナム通貨ドンもここでは通用していた。プノンペン市内は、主要な道路の通行ができるが、例えばモニヴォン大通りから一步路地に入ると、無人の家々が扉を閉め、瓦礫の山が残っていた。しかし、徐々ではあるが、公共施設などが整備されつつあり、復興はめざましいものがある。

八月八日早朝ブノンベンを発ち、国道五号線をバツタンバン經由でシェムリアップへ向った。道路は補修がなされておらず、大小の穴があき、車はスピードを出して走れなかった。トンレ・サップ湖の西側に広がる広大な沃野、行けども行けども稲田と畑地、オウギ椰子の疎林が続き、ここはカンボジアの穀倉地帯であった。早生稲の初穂の刈り入れをやっているかと思えば、田植えの最中の光景にも出会った。車窓からは、ボル・ポト政権時代の集団強制労働組「サハコー」の共同食堂と、これを取り囲む高床の三坪ほどの小屋が、十メートルの間隔で建てられていた。

かつて米穀の集散地ポーサットの市街を通り抜けたところで、道路の両側に打ち棄てられた数台の装甲車、焼け焦げた軍用トラック、大小の火砲数台、畑の中でひっくり返えった戦車などが見られた。そこは一昨年の激戦地跡であった。二九一キロを走り、午後二時過ぎにバツタンバン市内へ到着した。

バツタンバン市は、サン・ケ川に沿って拓かれた町で、一九〇七年まではシャム(タイ)領であった。殆んどの家屋が扉を閉め、路地の奥は瓦礫の山であった。かつ

て雑踏で賑わっていた中央市場は、人一人いなかった。

四、バツタンバン美術館の惨劇

サン・ケ川に面したワット・ポー寺院の境内には、バツタンバン美術館がある。ここにはこの地方のアンコール時代の彫刻類、石碑、楣、破風などの浮彫りが所蔵され、小さいながらもよく名前の知られた美術館である。州当局の係官の案内で館内に入ることができた。二百坪ほどの広さの内部は、彫刻や石柱の破片が散乱し、四隅には約八十点ほどの展示美術品がうず高く積みあげられていた。啞然としてその場に立ちすくんでしまった。楣や破風は台座から外されてひっくり返えり、ガネシャ(歓喜天)像は首がもぎとられ、仏像の頭部が叩き割られていた。ヴィシュヌ神立像は脚と手が鈍器で打ち壊わされ、小柱や格子窓支柱は倒されていた。浮彫りの一部が損壊していた。奥の壁際では、柱頭や彫刻の破片で炉が造られ、煮焚きをしていた。壁が煤で黒くなり、焦げていた。

さらに驚くべきことは、台座の壁や白い仕切り壁に落書きがしてあり、春画が描かれていた。革命兵士の勇ま

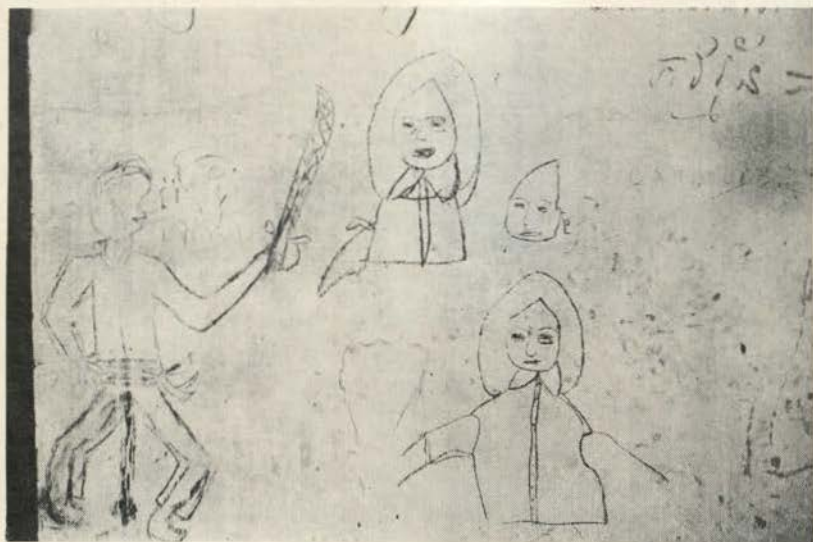
しいスローガンなど何もなかった。アンコール・ワット
境内の仏像粉碎現場と同じように、アンコール神・仏像
の悲惨な墓場であった。カンボジア人の民族的な文化遺
産を人為的に破壊することこそ糾弾されねばならない。
一刻も早く本格的な保護、修復作業が開始されることを
鶴望しつつ。

(終)



プノンベン博物館・正面入口

—カンボジア独特の建物—



バットバン美術館
—館内の落書き—

浄土句集

京都 安藤 寛

串船くしふねをさげて元帥七五三

評 昔は子供に何になると聞くと元帥と申

した。七五三には金筋十本のその元帥服で、軍刀でなく飴を下けている。

福岡 荒牧 還愚
歌謡うたを孫の離れず冬ぬくし

評 子供は風の子で遊んでいる間は寒さも
気にしない。ぶらんこの子達は冬ぬくけ
れば、いつ迄も離れようとしなない。

東京 新井 新生
原宿は若人の町冬来る

評 東京はあちこちに盛り場があり、若人

一田牛畝選

の集る所は原宿か。冬が来ると盃を交し
合ふて、不夜城の原宿は楽しいものらし
い。

群馬 島津 か寿
年忘れ得意の人に喉任す

評 音痴の人は歌のマイクが廻つて来るの
は嬉しくないらしい。得意の人が横に居
てくれれば、その人の喉が頼みである。

東京 吉田ゆきあ
天平の仏の里の柿落葉

評 天平の仏の寺々をつなぐ里の柿は真赤
に紅葉し、その落葉を踏んでの奈良の旅
は、さぞかし楽しかりしことならん。

福岡 高良 慈風
これしきのことが何んのと寒灸

山形 松田 允子
子に伝えたききたりや薺打なづなつ

東京 真野よし子
行秋や亡夫なきの日記に吾が名あり

東京 栗原やえ子
嶺々ねね昏くらて薺妻の花のみ白かりし

東京 鈴木 葉子
菩薩とも夜叉とも変る秋の雲

東京 末常てる子
天高く山門高くと見上ぐ

福岡 青柳 良巖
叡山の峯黒々と秋の雨

福岡 植藤みきを
大荷物右往左往し歳の市

福岡 服部 光代

暖込みて法話途切れし十夜僧

東京 吉原登起子

初詣経おえし七堂初明り
大分 丹羽 難中

福岡 高良 幸代

銀嶺を茜に染めて初日の出

東京 小笠原香祥

風しきり霜よけ亡父をほうむらむ
東京 失 名

福岡 稲永 新

孫達のベルトゆるめてお雑煮を

東京 田中 秀代

町中に広き墓苑や花櫓
東京 小松はつ枝

山形 松田 光誉

掛けかへし縁起の軸に初日さす

三重 森 静枝

床に寝つかれぬことあれこれと
福岡 积河野ねはん

福岡 上滝津弥音

日当りの砂場に幼児冬ぬくし

山口 三井 寛静

朝寒や不精の髭も剃らぬまゝ
福岡 前田 秀峰

東京 鳥居 千代

秋風や樹上の庭師耳遠く

三重 山田 うた

句を添へて死刑囚より年賀状
福岡 国友 星畝

東京 栗原とも子

姉の忌を修し安堵の秋の旅

山口 上野 明達

煤払ふ六字の名号唱へつゝ
福岡 林 澄山

東京 猪瀬 幸子

木の実踏む音の奥なる鹿かな

福岡 安藤平次朗

春雨の宿をとりたる祇園かな
一田 牛畝

表紙のことば

「鶏抱き童子」

土屋 正男

民俗人形の中にも鶏抱き人形の愛らしいのがいくつかある。鶏合せは三月の季題で闘鶏のことである。

古くは鶏は夜明けを告げる鳥、太陽の鳥で東西に通して聖鳥視する習慣があったので闘鶏もはじめは農事や吉凶を卜するため、もとは中国から伝わり禁裏においても闘鶏の儀が行われたという。鶏抱き人形は床しいその頃の姿を今に残しているものかも知れない。

いつの頃からか神事の闘鶏が賭事の遊びとなり、鶏さえもが今は解ると直ちに雌雄鑑別

の果、雌は身動きもままならない狭い中で卵製造機械とさせられて、卵は商品としてパックされ、老鶏は雄鶏と共にブロイラーとなつて店頭に積まれる。剥がされた鳥皮はやき鳥となつて酔どれの腹に納まる。すでに生き物ではないのである。

今昔物語の世界では毎日鶏卵を盗み喰つていた男が地獄の獄卒に日中畑なかに連れ出され劫火の刑を受けて大火傷した話が載っているが、人間世界の商魂にかかつては地獄の獄卒も油に揚げてフライ鬼珍にされかねない妻

じい世の中ではある。

今年は酉年。酉の字は蓋付の酒壺の意でひいては酒をも意味したという。この字は八月の月が黍を收穫して酒を仕込む月なので八月を指すともいい。十二支の動物がそれぞれに十二方の守護者で酉は西方を守る竜虎に劣らぬ強い神様なのだという。

酉は鶏で、酒壺であって西方浄土の守護者でもある。妙ななしである。妙ななしを

もう一つ添える。或る日李太白だか山上憶良だったかが隣家の使いから書面を受けた。

「水辺に鳥在り、半天には月。草上の草を掃って樹下に君と対坐せむ」とある。これを読んだ詩人、ニヤリと笑ってのこのこ出かけていったというのだが、さてこの意味はどういうことなのだろうか。

但し真偽の程は聞きもしました。

◎『浄土』表紙版画販売についてのご案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、土屋正男先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

△ずいそう▽

フランスで会った人々



曾^そ田^だ文^{ふみ}雄^お

(島根大学教授)

ドゴール空港から市内のターミナルまでバス、そこからタクシードでサントノレホテルという順序だったが、バス降車の際、どさくさまぎれに、肩掛け鞆のポケットに入っていたカメラを同行の一人が抜取られてしまった。

「七、八年前のバリとは大分変わりましたよ」と注意を受けて出て来はしたが、改めて身の引締まる思いであった。

ホテルは四つ星。超一流ということだが、カウンターに近づくや、如何にもフランス人らしい中年のボーイ長でビエールというのが「ハロー、曾田サマ」と鍵を手渡す。日本語の出来る男がいて幸い、と思ったが、こんな

程度しかしゃべれないらしい。でも、片言の話せることが大層得意な様子。「何しに来た」というから「大学の調査」と答えたら「大学なんて止めとけ。近頃の大学生なんて使い物にならん。十四歳から働いている俺の何分の一の仕事さえ出来んじやないか」と来た。同行の東北大学の泉田教授は二度も留学した経験者故、早速大学本部に電話を入れた。ところが教授の年末ストで、翌週でないことには面会不可能。ビエールは「それみろ。大学なんてそんな所なんだ」と鬼の首を取ったみたいな顔でわめく。別れる朝「日本に帰ったら、俺みたいになんて日本語の上手な奴がいると話しておいて呉れよ、なー」と念を

押したことだ。

すぐ近くに、二十六フランで肉料理食わす店が見つかった。入ると、五、六人でトランプをやっている。常連らしい。毎夜見かけることになったが、撮影にも快く応じて呉れた。年配の夫人が通いの娘一人使ってきりぎり舞いの体なのに、店の親父はといえば、テーブルの一つに坐ったまま、葡萄酒をちびりちびり傾けているばかり。この娘、どんなに店が混んでいようと、八時が来れば、コートまとして、さっと帰ってしまう。店内では大したことないのに、一旦通りへ出るや颯爽としたバリ娘ぶりだ。あとは年とった夫人一人の大奮闘が続く。常連の一人にアル中の婆さんがいた。ブツブツ呟きながらカウンターの辺をうろついている。こんな手合いは、かなりいる由。

街頭は、注意しないとすぐ犬の糞を踏んづける。散歩させている姿に腰々ぶつかった。

まっ先に行ったのが印象派美術館。一般のガイドブックに載ること少ないこの館、チュイルリー公園の外れ、コンコルド広場に接し、通りを隔てて海軍省、という位置にあるが、仲々立派なものが揃っている。

次がルーブル美術館。カルーセル凱旋門を前にした景観は素晴らしい。二日に亘って探すのに、ミレーの作品群がどうしても見当らない。東奥三階の筈なのに、階段に鎖が下りている。フラッシュ使用が許される為、ミロのヴィーナスなどかなり明るい部屋故、服部光喜君に借りたカメラを構えるが、光不足で写りそうになかったのは返す返す残念であった。

シテ島に渡り、サント・シャペルのステンドグラスを観る。戦時中、分解して田舎へ疎開させたというグラス、撮影料を払いさえすれば、自由にフラッシュを焚いてよい。隣りの裁判所では、丁度裁判官の卵が男三人に女一人、法衣をひらめかせて階段を降りて来るところだったが、小憎らしい程に服が似合っている。

ノートルダム寺院。パリの場合、まず探すべきは、正面広場に埋められた道路里程標識である。それを踏まえ、全フランスの零米地点に立てた喜びに一瞬ひたる。セーヌ河を挟んで商事裁判所に対した横、乃至後方からの眺めは圧巻である。

カルチエ・ラタン的一角、カフェ・スフロに入ったのは、まだ四時前。泉田教授旧知の親父に食事したい、と

いうと、いやな顔した。夕食は五時以降故、皆飲み物ばかりを前にしている。「まあ坐つてろ」といったきり他の用事ばかりしている。と、ボーイの一人が肉料理を運んできた。他の客から「パリの習慣を破らせた奴」とばかりに、じろじろ眺められたのは店に気の毒みたい。誰だって食べられるものなら時間に拘わりなしに食べたいのはなからうか。

ヴェルレーヌ行きつけの酒場は、バンテオンからすぐの所にある。通りの向いの隅で、ランボーが彼の帰りをじっと立って待ったという。折しも日暮近いことも加わって、霧囲気たるや、御当人がヌツと現われて来そうな程だ。これらのことは、現当主の三代前が知っていた由。因みに、ヴェルレーヌの死んだ部屋は、少し離れたレストランの二階に今なお保存されている。

国立なることを示す国旗の掲げられた第三高等学校に足場が組まれ、煤落^{すすおとし}としの最中。パリが冬の暖房に石炭を使用していた為、建物はすっかり黒ずんだ。それを故アンドレ・モロー文化相の提案で綺麗にしようとは始められたもの。作業は何年も何年も続いている。本腰入れた斯様な芸当が日本で果して可能か。旧ソルボンヌ大学

本部に近い、リルケの旧居に向い合ったセラー夫人宅に一夕招待されたが、外見とは裏腹に、至極住み易くしつらえられた調度その他に感心した。名所旧蹟ならびに知らず、いつ迄も古い物にこだわるのが良いのか否か、じっくり考えるに値するテーマながら、フランス人は、古い物を上手に活用させていることに誤りはない。マクベスの舞台に擬せられる古城シャトー・ド・パンセンヌからの帰途、地下鉄を上る途中、人が沢山上り下りしている中で、フランス娘に道を尋ねられ吃驚した。ひどい訛りのフランス語で、櫓^{きざし}りをしに森へ入ろうか、といったいで立ちの大荷物を背負っていたが、筆者が何に見えたのだろうか。

サクレクール寺院を横に入った道で、日本人学生らしいのが二人、カメラを構えることしきりの様子。見れば、モルタルはふくれ上り、壁は剥げ、朽ちた棟木の奥まで続く露地の風景、リドとかムーランルージュに近い所だけに、こんな場所を写す物好きは日本人位か、と軽蔑してはみたものの、何とも興味ある被写体に、筆者も一枚撮った。惜しかったのは、芥箱の上に蹲っていた黒猫がいち早く逃げたことだった。

東北地方に伝わる黒川能を専攻し、その著作もあるマルツェル講師の案内によるバリ大学東洋学教室訪問は、冬日の射す暖い午前。グローニユの森では枯葉が微かに音を立てていた。東洋学教室の所属する第三大学は、現在第七大学に同居している。建物のP、Bなる印は、夫々がバリ側、グローニユ側なることを示し、当教室はBの方。大学と向い合ったビルの二階を指してマルツェル氏は「これも一つの名物ですよ」と笑う。ポール・クロード終焉の住いが其処にあった。教室には、ドイツやイギリスと違って、教材作製の器具が多い。オーギュスト・コント以来の、フランス実証精神を目の当り見る思いであった。

ヴェルサイユとフォンテーヌブローを廻る観光バスに乗る。日本語の通訳が付く、とのふれ込みであったのに、背の高い六十歳余りの男が近づいて「日本人はたった三人故、英語かスペイン語、どちらかの組に入って呉れ」と頼む。仕方なく後者の組に入る。英語組は別な中年婦人が案内する。ヴェルサイユを見終っても、庭園でゆっくりしている。「切角だから、向うに見えるトリアノン迄連れて行かないか」とねだったら「ナポレオンは

嘗て、何でも与えられるが、只一つ時間丈はどうにもならぬといった。だから私もお前に時間がやれない」、これが答えであった。

バルビゾンを、バスが少しスピードを落して通り抜けるに当り「天皇が云々」と説明していたが、十分聞きたれず。以前一泊なさったことでも話したのだろう。あんな場所で、天皇陛下が話題に出るなど思いもしなかったことである。

フォンテーヌブローで、部屋々々の案内に当り、しきりに天井や壁の名画について説明するのに、スペイン組ときたら、スペイン人らしい茶系統の服装の、日本にも居そうな小母さんがましな程度で、メキシコの母娘、南米の夫婦など、確な教養もありそうに見えない。このメキシコ人は、車の動き出す前から眠りこけ、集合時間には遅れる。それでいて案内人の落度だ、と口を尖らすやら、程度は誠に御粗末の一語に尽きる。だから、説明の仕甲斐がないらしく、寧ろ、吾々に、フランス語でちょくちょくサービスして呉れるようになった。「あれがブシケー」というから、「ああ、あれか」と感心して眺め上げると「日本人は偉い。何でも知っているじゃない

か」と、プシケーが屢々蝶に準えられることについての解説までして呉れた。スペイン語組はキョトンとしているばかり。帰る車中で、この案内人、「近頃日本語の勉強を始めています」と、泉田教授から日本語を教わっていた。聞けば三歳の折、ロシアを亡命したという。観光が終ったのは、夜に入ってからかなりな時刻の頃であった。それにしても、ヘッドライト点灯が許されず、フォグランプで走る自動車群の、尾灯と織成す色彩は素晴らしい。最後に、フランス気質の一端を示す話で締括りたい。

「ECCについて、どう考えるか」の答え、「あれは政

府がやっていることで、吾々には関係ない」

イランの人質問題について、「米国から一緒にイラン制裁をしようと持ちかけられたが、人道的立場から、吾々は話に乗らなかった」

一つはドイツの大学教授、一つはフランスの下宿屋のおかみさんが答えたものである。人質問題に対するフランス政府の処置ぶりをわが事のように弁明してみせるフランスのおかみさんがいった言葉、ここらにも政治好きなフランス人の一面が窺えるように思った次第である。

◎ お 願 い

諸物価の高騰、及び郵便料金の値上げにより、弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、やむをえず値上げ変更することになりました。

昭和五十六年四月一日より、新年会費三、〇〇〇円とさせていただきます。
どうぞくれぐれも宜しくお願いいたします。

法 然 上 人 鑽 仰 会



念佛ひじり三国志 (全)

— 法然をめぐる人々 —

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

覚明房長西は、そこで「観無量寿經」が説く阿弥陀仏の慈悲を明遍に熟っぽく語って聞かせた。

印度マガダ国の支配者だったビンバシヤラ王は、美貌なイダイケ夫人と何不自由なく睦まじく暮していた。だが、ふたりの間には子供が出来なかった。

占師を招いて占わせると、ある山中に棲む仙人がいる。その仙人こそが、生まれ替わってあなた方の王子に

なる男だという。

王がその山へ家来を派して調べると、なるほど老体の仙人がいる。老体ではあるがすこぶる元気で当分、死にそうにもない。報告を受けた王は、あせってその老仙人を殺すことを命じたのである。

占師の予言どおりイダイケ夫人は、老仙人の死後まもなく妊娠し、男児を生み落した。アジャセ王子である。

この王子は成長すると出生の秘密を知ってしまう。父に怨みを抱くようになる。そこへ現れたのがダイバダッタだ。彼は王が積尊の外護者であることを知っているか

ら王子をそそのかして父王を殺そうとする。

かくてアジャセ王子が父王を幽閉し、イダイケ夫人がこの夫のために尽くす有名な物語となる。だがその甲斐もなくビンバシヤラ王は獄中で死ぬ。

釈尊はイダイケ夫人を救うために阿弥陀仏の慈悲にすがって道を説く。

「阿弥陀仏のお慈悲はね」

と、若い長西はいっそう力をこめて語り続ける。

「極悪人、父殺しの五逆罪を犯したアジャセ王子にまで、改心したがゆえに救いの手をさしのべたことを涅槃経で説いているんです。思えば罪を犯すのも人間の成業（なりわい）であり、こうした下品下生の極悪人が救われてこそ真の仏法でしょうね」

「覚明房とやら、そなたは未だお若い。知識は豊富でもわが身にふりかかった体験はお持ちであるまい。わしなぞは……」

と、明遍は遠い昔を回想する。

父信西入道のことであった。

保元ノ乱で四国の讃岐へ流罪となった崇徳上皇は、弟の後白河あてへ三年ほどして文を送ってきた。

自分は配所暮らしで、わが指を切ってはその血で五部の大乗経（華嚴、大集、般若、法華、涅槃）を写経し終えた。是非これを後生菩提のために燃るべき寺へ納経して欲しい。

後白河は信西入道に相談した。父はこう答えたと言

く。
——この願は後生菩提のためか知らないが、次にとどのような発願をするやはかりしれない。この写経を受容なさってはなりません。

後白河も「さもありなん」とこの申し出をしりぞけた。

「新院（崇徳上皇）はたいへん悲しまれ、配所の地でそのまま果てられた。わが父信西もその後幾ばくもなく平治ノ乱で土中へもぐり、地虫のように死んでいったわ。わしは父が土中へもぐるところを、この眼でしかと見た」
「そうですか。崇徳院の話は私も聞いております。お写経を拒絶されるや、舌を噛み切りその血で奥書きをしたためられたと言うではありませんか」

長西はその奥書きの全文を、そらんじていた。

＜ビンバジャラ王とイダイケ夫人＞



——吾深キ罪ニ行ワレ秋薨浅カラズ。速カニコノ功力ヲ以テ、カノ科(とが)ヲ救ワント思ウ莫大ノ行業ヲ、シカシナガラ三惡道ニ投ゲコミ、ソノ力ヲ以テ日本国ノ大魔縁トナリ、皇ヲ取ツテ民トナシ、民ヲ皇トナサン

この写経の功力をすべて悪のために投じて自分は日本を呪う魔王となる。天皇を引きずりおろして賤民となし、賤民を天皇にするのだ、という恐ろしい誓願である。

「この国の王家もビンバジャラ王やアジャセ王子の悲劇と同じようなことをくり返しています。今こそ阿弥陀仏の救いによらねば、どうにもならないでありますう」

いささか小賢しい感じがしないでもない。明遍はこの若い専修の徒に不快感をおぼえる。

「ところで覚明房。おぬし、何の用事があってまいったのか」

「是非、法然お上人さまのもとへご同道願えませぬか」

「……」

「委細はあの若者、緑道から聞きました。明遍さまには

今、法然上人さま手づからのお救いが必要です」

小癪なつ、と叫びたい激情が明遍の胸を走った。

「それは、法然ご房からのお言葉か」

「いいえ、お上人さまは何もご存知ありません」

「そなたが緑道から聞いた上での幸領じゃな」

「はい」

「わしはな」

と明遍はつとめて言葉をゆっくりつずろうとつとめた。激情を生まにぶちまけてはならない。

「何か……」

「法然ご房の教えに疑義がある」

「とおっしゃると」

「法然ご房は、いつも偏依善導ということをおっしゃる」

「さようでございます。善導和尚の教えが、法然お上人にはすべてなのでございます」

「わしが調べた範囲ではな、善導和尚が説く阿弥陀仏は、仏法と異質なのではなからうか」

「どこがで、ございましょうか」

「吉蔵、嘉祥大師の文から判断するとな、あの唐の太宗紀、長安の都へきた浄土教は天竺からのものではな

い。当然、同じ時期に長安で学んだ善導和尚が信仰した専修念仏も仏法以外のもののように思われてならない」
「どんな論証がございますか」

覚明房長西は喰い下がってきた。

「玄奘三蔵が天竺へ旅して、経巻を持ち帰ったのは唐の高宗の治世じゃ。当時、善導は長安の都にいて、しきりに称名念仏を唱導していた。しかし、玄奘が持ち帰った経巻には阿弥陀仏に関する物はなかった」

「そのとおりでございます」

「玄奘以前の法顯の場合もそうであった」

「と、おっしゃると明遍さまは……」

「善導の説いた念仏は仏教とは無縁な俗信仰ではないのだからか」

若い長西の澄んだ瞳を、じっと覗きこむ。

必ずしも若僧の博識ぶりをねたんだ嫌がらせばかりではなかった。近ごろの明遍は、法然が説く「偏依善導」の称名念仏に、ある疑問を抱きはじめていた。疑うようになった直接の動機は、光堂へやってきた聖道門の僧から「選択本願念仏集」を借りて披見してからであった。

二

法然の門弟たちがまとめたと言われる「選択本願念仏集」——「選択集」は、専修念仏の「黄金憲章」であるとともに、これの書写を許された門弟は、念仏ひじりとしてエリート地位を確保した、とさえ自他共に信ぜられる權威があった。

その聖道門の僧が、どんな径路で「選択集」を入手したのか、明遍は知らない。また知りたいとも思わなかった。

披読して明遍は、その大半の内容に共鳴し、かつ深い啓示を受けた。仏法の真髓へ迫り得る道は、この念仏以外にはあり得ない、とも思った。

だからこそ若い修行僧の緑道を東山へ送りこんだのもあった。

だが、「選択集」の末尾を、つい昨日精読して俄かに疑義が生じた。

——ヒソカニ以(おもん)ミレバ善導ノ観經ノ疏ハ、

コレ西方ノ指南、行者ノ目足ナリ。シカレバ則チ西方ノ行人、必ズスベカラク珍敬スベシ。ナカンズクニ毎夜ニ夢ノ中ニ僧アツテ玄義ヲ指授ス。僧トハ恐ラクハコレ弥陀ノ応現ナリ。シカレバ謂ウベシ、コノ疏ハコレ弥陀ノ伝説ナリト。如何ニイワンヤ、大唐ニ相イ伝エテ云フ「善導ハコレ弥陀ノ化身ナリ」ト、シカレバ謂ウベシ、マタコノ文ハ、コレ弥陀ノ直説ナリト

完璧な智恵と手がたい実証で裏付けられてきた法然の称名念仏が、ここへきて突如として飛躍するのである。

智恵と実証とは……末法思想を踏まえて下品下生となつた人間が救われる道。すでに持戒も発菩提心も効力は薄い。複雑多岐な社会生活が戒律を維持しきれなくなっている。生き抜くための意慾は、しばしば菩提心と対立した側で機能されねばならない。だからこそ「自力」を捨てて「他力」なのだ。人間がひたすらに阿弥陀仏の慈悲を渴仰すれば、仏もまた人の心を汲んで共に嘆き共に泣いて下さって、愛の手をさしのべて下さる、と「選択集」は力説する。

そこまでは殆んど無我夢中で引きずりこまれてきた明遍だったが、末章へ至って俄かにさめた。

夢感に阿弥陀仏が現前して善導和尚と交信するといふ。その善導は弥陀の化身と伝えられている。だからこの交信内容こそは「阿弥陀仏の直説」だと締めくくる。

明遍の脳裏に、善導和尚が在世した当時の唐代の諸資料がよみがえる。

「あのころの長安には、西域の異邦からさまざまな邪法俗信が混入してきたようだ」

と眼前の若い長西に語りかけた。

「それは、うかがっております」

「唐の太宗から高宗へかけての治政、長安には十万人をこえる紅毛人があふれた。彼らはそれぞれの神や信心も持ちこんでおる。言語が不通ゆえ、すべてを仏教の言葉で表現した。まぎらわしいな」

「はい」

そのとおりであった。

七世紀初頭、隋をほろぼした唐の太宗が天下を統一、都を長安に定めるや、西域の文化は怒濤の勢いで流入してきた。宗教だけでも五指に余った。

妖教は、後にゾロアスターと呼ばれたベルシャの拝火教だ。景教はキリスト教の一派で、ローマ教会と対立し、この中国に教線の伸長を企図した。イスラムの回教もあった。また拝火思想を主体にしキリスト教や仏教を適宜に混入させた摩尼教。

仏教自身の内からも純中国製の三階教団が勢力を拡大していた。

「なかでも景教はな、神の慈悲を訴え、浄土往生を説いた。その神は阿弥陀仏と酷似しておる。人間の苦しみを一身にかぶり、いかなる罪障深き者でも往生させると誓っている。人間とこの神との交信は、聖霊を体感することじゃ。夢感であったかも知れぬ。人間は夢感で神の愛を確認し、ひたすらに浄土へ往生することを希求する。ただしその浄土は西方極楽でなくて、中天じゃ。修法の儀礼はくり返しその神の御名を唱えることだという」

「景教のこともうかがっております」

覚明房は落着きはらっていた。

「善導和尚の称名念仏、じつはこれではなかったかな」

「……」

「わしは、ずっと以前から法然ご房がたぐい稀れなお人

であることを承知している。その念仏論も当代の人間を救い得る唯一つの道であろう。だが唐の善導和尚との関係だけが気にかかる」

「偏依善導が、ですか」

「うむ。善導和尚の称名念仏が景教の模倣ないし受け売りだったとすると、法然ご房はとんだ「非仏説」を弘布していることになる」

「非仏説……それは違います。明遍さま」

「違うか。確たる証固でもあるのか」

「はい、ございます。確たる証固が……景教が浄土教ではないか、と迷われたのは明遍さま、貴僧だけではありませぬ。じつは唐の太宗自身が困惑したのです。景教の尊者（僧）たちが太宗の皇后文徳の病氣平癒祈願を唐政府へ申し入れてきました」

文徳皇后は、唐が天下を統一する以前、山西の太原にいたところからの篤心な念仏信者だった。病い重く、念仏しかないと思った太宗だが、祈願を申し入ってきたイラン人僧たちが果たして仏法の念仏者なのかどうか判別がつかない。大臣の魏徴に相談をしたが、天下無双の智者である彼にも判らない。

かくて太宗は自ら山西の太原府へ出かけてゆくのである。

——太宗、昔北京ニ幸ス。文德皇后不豫、輦ハ蘭若ヲ過ギテ禪師綽公ニ礼謁ス

と石碑にも刻み残っている。北京は太原のことで、輦は天子の乗物が石壁山玄中寺の蘭若(伽藍)をよぎり、綽公の道綽禪師に礼謁したのである。文德皇后の不豫からの回復を祈ると共に、浄土念仏の真髓を確認した。

確認した証固に、長安へ戻った太宗はほどなく景教ネストリウス派のために寺院を建立してやる。ただし建立場所は仏教諸寺院から隔絶した妖教や摩尼教寺院のある一画だった。「ペルシヤ胡寺」と呼ばれた。

道綽禪師は言わずと知れた曇鸞につらなる浄土列祖で、善導の師僧にもなる。

覚明房長西は懇切丁寧に説明を讀ける。

「文德皇后が亡くなられたのは貞観十年六月のことでした。太宗が玄中寺へゆかれた日付けは正確には判りませんが、その直前でありまじやう。明遍さま、あなたは選

択本願念仏集をお読みですね」

と念を押してきた。

「うむ、読ませてもらった」

「あのうちで、師資の釈がございましたね。問うて曰く、もし師によって弟子によらずば、道綽禪師は、これ善導和尚の師なり。そもそもまた浄土の祖師なり。何ぞこれを用いざるや。答えて曰く。道綽禪師はこれ師なりといえども未だ三昧を發さず……」

すらすらと「選択集」の文をそらんずる。

道綽は善導の師であった。にもかかわらず、なぜこの道綽を念仏の祖と仰ずに偏依善導となしたのか。法然は力説する。道綽は未だ三昧発得——宗教上の回心悟達を得ていなかった。かえって若き弟子の善導からその三昧を教えられたのだ、と「選択集」は逸話を告げるのである。

善導が、石壁山の玄中寺に道綽禪師を訪ねたのは、太宗が訪問する直前、貞観八年前後と推定されている。

私は称名念仏を積んでいるのだが、果たして往生が出来るのか、と問うた。善導は一茎の蓮華を示し、七日間の行道(仏の周囲を称名礼拝しつづまわる行)して、この花

が凋れることがなければ、往生は間違いなしです、と答えた。

果たして、七日後も花は凋れず。色あせることもなかった。

善導は、さらに老師の過去で犯した三つの罪を懺悔することを求める。その罪とは、第一が尊い仏像を軒下に放置し、自らは奥の部屋へ引きこもって暮した。第二は、出家者に走り使いをさせたこと。第三は伽藍を新築した折、虫の命を奪った。

いずれも些細にみえるが、完全な修法者であった道綽禪師ですら、なおこんな罪を犯している、と善導は指摘したかったのであろう。

道綽禪師には思いあたることばかりであった。ただちにそれらを懺悔する。

三

法然や明遍がその在世期に、これらの資料や逸話をどう受け入れたか。今日、われわれは書き残し、言い伝えられた片言雙句からしか臆断できない。

唯一つ、法然がここで宗教体験の最重要事として「三昧発得」をあげている事実が理解できる。称名念仏を、学問や知識としてではなくて、全身全霊を阿弥陀仏への渴仰に余すものなく投入してこそ、時間と空間を超克した三昧境へ没我してこそ真の「西方の行人」とする。

師の道綽は浄土教の祖師ではあるが、未だ三昧を発得していなかった、と「選択集」は断言する。だからそれをすでに得た善導和尚こそ「善導一師ヲ用イル」のである。

法然自身も建久九年（一一九八）の四月、六十六歳で三昧発得している。善導は夢の中で阿弥陀仏とめぐり遇うが、法然は同じように夢感で善導と対面することを得た。

近代の頭脳はともすると、こうした宗教体験を軽んじがちになるが、じつは宗教ではこれがすべてなのである。この形而上の靈驗からすべてが発し、すべてが完結する。

それはともかく光堂で若い覚明房長西と対談していた明遍は、法然の偏依善導を領解し尽したのだった。

唐太宗はネストリウス景教と阿弥陀信仰との混然に迷って玄中寺に道綽禪師を訪ねた。釈然とその色別を領解

し得た。道緯は、若き弟子善導によってこれ以前に念仏回心を得ているわけだから、善導一師に依るとする法然の称名念仏には微塵の誤りも影もないということだ。

これは法然の時代には未だ渡来していないと思うが、「大唐西域求法高僧伝」なる書物がある。中国からインドへ向った唐代の僧たちの記録だ。ここで貞固律師という僧が、再度にわたって善導を訪ね、浄土教を学んでいる。もちろん貞固の渡航年次は、善導在世の晩年とも符合する。なお貞固律師はインドの土を踏み得なかったが、スマトラ島で帰国する訳経僧たちと合流し、長安へ帰って携えた経巻を時の権力者則天武后に献じた記述も現存している。

当時、善導がまぎれもない浄土教の大指導者だった事実が裏書きされる。

「明遍さま、それにしてもあなたがおっしゃった阿弥陀仏を異域の俗信では、と感づかれた着想はお見事です」

と若い長西は、いったん否定しつつした明遍の疑問をあらためて拾い直す姿勢になった。

「何か申したいのか覚明」

「たしかに仏法の中で阿弥陀仏への信仰には異域の臭気

が濃厚に混じております。光りとか炎は、西域の国では山や海が燃え砂漠に火柱が立ちのぼっているそうです」

「なるほど……」

「拝火教徒は、この炎を神として崇めます。でも恐れるばかりで、近づこうとはいいたしません」

こんにちで言う石油資源のことであろう。

若い長西は、燃灯仏とか鍔光如来として阿弥陀の祖師にこの天然の炎を仏格化した浄土思想をこう説明する。

釈尊の弟子たちは早くからこの地へはいりこんで、自然の火を生活の資とする方法を考え出したのであろう。ただ恐怖して拝がむだけの拝火教徒たちと一線を劃した。

自然の炎は人間の生活に高度なうるおいをもたらす。恐れる神ではなくて、愛と慈悲の天恵だとする。そこから法蔵比丘の誓願が生まれ、阿弥陀仏が出世した、と大胆な推断を下すのである。

「明遍さまがおっしゃる景教の神も、なるほど阿弥陀仏とたいへん性格が酷似しております。しかし、その神が西域に出現するより遙か以前、すでに阿弥陀信仰は完成していたのです」

景教の神——それはキリストだ。十字架上で処刑されたこのガラヤの子が信仰の対象となつたのは四、五世紀ころからである。浄土宗の経論が中国で訳出された最古のものは「般舟三昧経」だが、二世紀の半ばであるし、「阿弥陀経」もそれから三十年ほど後にもたらされている。

長西の言い分は、仏教が西インドの風土のなかから把握した浄土メシヤ思想が西域民族のあいだへ流出していった、と主張する。その正否はともかく明遍は、若いひじりの該博な知識に舌を巻くばかりであった。

「ところで覚明、わしが披見した念仏集は妙な言葉で結んであったぞ」

「どんな言葉で？」
「そらんじておる」

明遍は一字一句たがえずに末尾の部分をおずさんだ。

——コイネガワクバ一タビ高覧ヲ経テ後ニ壁ノ底ニ埋メテ窓ノ前ニ遺スコトナカレ。オソラクハ破法ノ人ヲシテ惡道ニ墮セシメザラムガタメナリ。

これを読んだ人は、そのあと壁の底に埋めて窓の前に残したりしないで欲しい、と刺戟的な文章で結んでいる。つまりこれを読んで邪法邪義だと浄土教をそしり、惡道に墮ちる人が出現することは本意でない、と警告するのである。

「この前文に、然ルニ今、図ラザルニ仰セヲ蒙ル、辭謝スルニトコロナシ、とある。いったいこの念仏集は誰かの頼みによって書かれたものなのかな」

「……」

覚明房長西は、明遍のこの問いかけに何と答えたのであろうか。

現代では、この「選択集」が九条関白兼実の懇請によって撰述された、とは常識になっている。それはそれで事実であらう。

だがこの時期、兼実自身も存命中で、また政治上でも複雑な立場にあるさなか、麗々しくうたいあげたかどうか、大いに疑問である。

「選択集」の筆の運びはきわめて論理的だ。かつ堅固な実証が裏打ちされている。それが善導と道綽の「三昧発得」に至り俄然、飛躍をとげる。学問の書から宗教

ドグマの熱流を感じさせる。

この熱流こそ宗教性の純度であろう。如何なる權威——政治、財力、学識にも屈しない「信心」の核だ。

ところが末尾へきて、再び突如として「図ラザル仰セヲ蒙リ」と、何ものかにこびへつらうような文体に変貌する。学の高次性も、宗教の純度も途端にかき消される。

思うに、流布にあたって書き添えた部分ではないだろうか。

となると、誰が何を企図して書き添えたかが問題となってくる。宗教のドグマから、ある種の政治テーゼへと変質するからである。

いわんや「壁ノ底ニ埋メ窓ニ」残すなに至っては、反撃を誘発する挑戦状以外の何ものでもない。たとえ破法の悪人が現れるのを防ぐためとは言え……後年になるが、梶尾の明恵上人が「摧邪輪」で邪義邪法の書ときめつけたのも、この末尾の数行がある限りでは正しかったかもしれない。

「覚明、東山へ戻ったら法然ご房に伝えて欲しい」
明遍は言った。

「はい、どのように？」

「しばらく都をお離れになることが得策ではないかな」

「都を離れるのですか。お上人さまが……」

才気渾発な覚明房長西だが、こうした話題になるとさっぱり頭脳が回復しないようである。ただぼんやりと明遍を見つめるだけだった。

(つづく)

◇◇訂正とお詫び——

そして、お願い◇◇

『浄土』二月号五頁上段八行目、「冬の御歌を排し上げると」とあるのは、「冬の御歌を拜し上げると」の間違いでした。筆者の須藤隆仙先生及び読者諸兄に対して心からお詫び申し上げます。

このように、『浄土』誌はいつもながら校正ミスや誤植が多く、まこと申し訳ありません。しかし、今後共『浄土』の一層の発展のために暖かいご支援をくれぐれもお願い申し上げます。

二 編集後記 二

○昭和五十六年一月二十日をもつて、郵便料金が大幅に値上げされることになりました。とくに第三種郵便物の値上げ幅は多く、微力な活動を展開する法然上人鑽仰会にとっては、大変な打撃を蒙ることになりました。月刊機関誌『浄土』の刊行と発送を唯一の業務とする弊会の活動の根本を揺るがす一大事となったわけです。ことに郵送費の値上りは、印刷関係の諸経費にも振幅して、新年度に入ってから値上り要求にもはね返ってきつつある現状です。時勢とはいえ、まことに遺憾この上ない現状となってきたわけです。実は『浄土』誌二月号の囲み記事の中で、すでにいささか報じましたように、やむをえず、まことにやむをえず、『浄土』の年間購読代金の値上げ変更をいたすことになった次第です。もちろん、旧来の年会費自体も、それ程安価とはいいいがたいわけですが、昭和五十六年四

月一日以降、年間購読費を三〇〇〇円に改定させていただきます。本当に申し訳ありません。読者諸兄にさらにご迷惑をおかけいたしますことになるわけですが、法然上人鑽仰運動への想いをこめて、また念仏信仰の一つの行とお思いをこめて、どうか、これまでとも相変らぬご支援、ご後援をお願いいたしたく、心よりお願い申し上げます。またこれを機会に、一人でも多くの読者をご紹介願えれば、この上なくありがたいのですが。

○ところで、弥生三月はお彼岸の月。世情はますます激動し、日々の暮らしこともなかなか思うに任せぬ社会環境です。合掌念仏の精進に明け暮れようとするこの想いさえ、一日一日の日常茶飯の出来事が押し流してしまいかのごとくです。三月十八日（水）からはじまるお彼岸の一週間は、ともかく流されがちな私たちの揺れ動く心、一つの生きる指針の確認を定める恰好の間であると思います。

（原 裕）

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

（送料不要）

浄土 四十七巻 三月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十六年 二月二十五日 印刷
昭和五十六年 三月 一日 発行

編集人 宮 林 昭 彦
発行人 佐 藤 密 雄
印刷人 関 二 三 男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

＝最新刊＝

ブツダの生涯と古代インド仏教世界を現地網羅取材

『ブツダの世界』

—The World of Buddha—

東大名誉教授 中 村 元

駒沢大教授 奈良 康 明 編 著

大正大助教授 佐 藤 良 純

＝写真撮影 丸 山 勇＝

◎仏教学・考古学・インド学の最新学問研究と、現地国考古学局の
学術協力のもと一年半の現地撮影取材とによって成った、わが国
で画期的な国際大型出版。

インド亜大陸未踏の領域に入って精密に把えた900点のカラー・
モノクロ写真を駆使し、釈尊の生涯と古代インド仏教の歴史を、
学界権威が900枚に論述。

最大規模の取材と最高水準の調査研究を集大成した記念碑的図
説インド仏教文化史。

B4変型判 上製クロス装 美麗貼函入 5色刷カバー付
カラー写真212頁 本文一色204頁 全416頁
現金定価 32,000円

発 行 学 習 研 究 社

〒145

東京都大田区上池台4-40-5

TEL 03 (720) 1111 内線 2737